HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	自然災害と支援のプロジェクト・エスノグラフィー : フィリピン台風被災地における支援の実践と持続可能なしくみに関する研究［論文内容及び審査の要旨］
Author(s)	細川, 貴志
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第14722号
Issue Date	2021-09-24
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/82991
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Takashi_Hosokawa_review.pdf, 審査の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　　氏名：　細　川　貴　志

主査　教　授　宮　内　泰　介
審査委員　副査　准教授　笹　岡　正　俊
副査　教　授　佐　々　木　亨

学位論文題名
自然災害と支援のプロジェクト・エスノグラフィー
―フィリピン台風被災地における支援の実践と持続可能なしくみに関する研究―

・当該研究領域における本論文の研究成果

開発援助にかかわる社会科学的な議論は、社会学や人類学などで多く行われるようになり、また、学際的な新しい分野としての開発学（development studies）も存在している。そうした中で、開発援助のプロジェクトを、単に結果から評価するのではなく、そのプロセス全体を包括的に評価する手法としてプロジェクト・エスノグラフィーという手法が注目されている。プロジェクト・エスノグラフィーは、開発援助の当事者あるいは伴走者が、そのプロセスへの深い参与観察により、記述し分析するものである。よりよい開発援助を進めていくための手法、あるいは開発援助の多角的な評価の手法として提唱されているプロジェクト・エスノグラフィーであるが、しかし、実際にそれを行ったものはまだ少数にとどまっている。

本論文は、そのプロジェクト・エスノグラフィーの手法を、当事者としての著者が試みたものである。著者の強みは、社会学・人類学の調査研究の経験をすでに豊富に持っていたこと、さらに技術者でもあり、加えて、開発援助プロジェクトの当事者であることである。そうした複数の側面を有する著者が、それを十分に生かすことによって、事象の複雑さや多面性を分析的に記述することに成功している。記述の厚み、正確さ、そして記述の中に多面的な分析が埋め込まれていること、それらが、プロジェクト・エスノグラフィーとしてのこの論文が評価できる 1 点目である。

この論文が評価できる 2 つめの点は、開発援助にかかわる種々の問題について、具体的で実践的な知見を数多く提供できている点である。たとえば、復興支援はどうすればうまく行くのか、開発援助が地域社会をどう変えるのか、などについてプロジェクト・エスノグラフィーの手法から明解な知見を提示できているし、他にも、支援によって導入されたものが持続的に利用されるには利用者のオーナーシップが大事であること、そのオーナーシップを生みだす要件としては支援対象組織内部のソーシャル・キャピタルが重要であること、さらには、産業の復興を考えるときにはサプライチェーン全体を俯瞰して支援対象をどこに据えるかを考える必要があることなど、重要な知見が実践的に提示されている。

このように、この論文は、社会科学的なバックグラウンドをもつ当事者による先駆的なプロジェクト・エスノグラフィーであり、その強みを生かして、開発援助にかかわる実践的な知見を豊富に提示できている。そのためそれは、研究者のみならず、多くの実務家にも開かれた議論となっている。その意味でも、プロジェクト・エスノグラフィーの今後の範ともなりうる論文であり、また、その可能性を大きく開いたものとして評価できる。

・学位授与に関する委員会の所見

審査委員会は、本論文の上記のような学術的および社会的な価値を高く評価する。

一方、本論文のいくつかの課題も指摘することができる。第 1 に、プロジェクトの中心にいた者のプロジェクト・エスノグラフィーであるために、プロジェクトの周辺の人びと、あるいはそのまた周辺の人びとや社会にまでは十分な記述・分析が及んでいないところがある。第 2 に、開発援助の他の事例や、他分野におけるプロジェクト・エスノグラフィーとの比較が十分でない。そうした他事例との比較により、本論文の知見はさらに一般性をもちうるであろうことが指摘できる。

しかし、口頭試問において申請者はこうした点について十分自覚的であることがわかった。したがって、これらの課題は、申請者の今後の研究や実践の中で生かされるだろうと期待できる。

以上を総合的に評価し、本審査委員会は全員一致して細川貴志氏に博士（文学）の学位を授与することが妥当であるとの結論に達した。